

東 都 大 学 図 書 館

通信 幕張キャンパス 第6号

Contents

- 先生のおススメ図書
……看護学科 准教授 堀之内若名
- 濫澤龍彦 ～病跡学的視点からみた『狂王』～
……看護学科 教授 櫻庭繁
- 図書館からのお知らせ
蔵書点検にともない、休館します

先生のおススメ図書

『認知症の人たちの小さくて大きなひと言 私の声が見えますか？』

看護学科 准教授 堀之内若名

「えっ、この方入所者さんなの？ てっきりスタッフさんかと思ったのに…」

少し表現が悪いかもしれませんが、その時の私の正直な気持ちです。

どのようなことなのかといいますと、グループホーム(認知症対応型共同生活介護)に実習指導に伺ったときの出来事です。初めて何う施設でした。入所者さん、スタッフさん、学生がホーム近くのスーパーへ買い物に出たというので私も追いかけてきました。ちょうどレジで支払いのタイミング、お財布からお金を取り出して支払っている女性が私にこやかに会釈をされたのです。すっかりスタッフの方かと思いきや男性スタッフから「いえ、入所者さんですよ」と、これまたこやかに返されました。そこで最初の「スタッフさんかと思ったのに…」というところになるわけです。認知症の方が持つ力のすごさ、認知症の方の力を最大限に引き出すかわりや、普通の生活を支援するスタッフの力のすごさに、すっかり感銘を受けてしまいました。グループホームとしての本来の機能をもつ素敵な施設です。

この本は、その頃の実習でお世話になった方も寄稿しており読ませていただきました。認知症の当事者、ご家族、認知症の方をケアする介護職、医療職の方々が、それぞれ心に残るエピソードを寄稿しています。一つ一つの短いエピソードの中に、認知症の方とその方をケアする多様なひとたちの感情の揺れが豊かに表現されています。読んでいるとその場面が浮かんで来て、自分がその場と時間を共有しているような錯覚にとらわれます。認知症の方が感じる世界と、認知症の方の生活を支援する方々の様々な思いが伝わります。幕張分館に蔵書があります。認知症ケアに興味のある方、そうでない方もぜひ手に取って読んでみてください。きっと、認知症の人というひととくりでなく一人一人の豊かな人生があるということ、認知症の方を支援する人々も試行錯誤しながら支援をしているのだということ、私たちも認知症の方を怖がらずに人としての尊厳を大事にしながら対峙すればよいのだということを感じさせてくれると思います。

『認知症の人たちの小さくて大きなひと言 私の声が見えますか？』

永田久美子 // 監修 harunosora 2015年
(916/N)



澁澤龍彦 ～病跡学的視点からみた『狂王』～

看護学科 教授 櫻庭繁

今回は大学までの龍彦の家庭生活を中心に書いたもので、今回は龍彦の作品について取り上げる。しかし彼の作品は600以上あることから、ルードヴィヒ二世(1845 - 1886年)について病跡学*的に書かれた『狂王』を紹介したい。この作品は1966年稀覯本として275部限定で刊行された。現在は「バヴァリアの狂王」と題を変えて、河出書房新社より刊行の『異端の肖像』に所収されている。

ルードヴィヒ二世はのちにドイツ帝国の一部となるバイエルン国の第4代国王である。音楽と建築に破滅的浪費を繰り返し、「狂王」の異名を持つ。幼いころからゲルマン神話や騎士伝説などの物語に親しみ、中世騎士道へ強い憧れを抱いていた。特にこれらを題材としたワーグナーのオペラに心酔し、のちに彼の出資者となるのだが、『狂王』でもこの二人の関係の記述が多くを占めている。龍彦はワーグナーがルードヴィヒ二世に拝謁したのちに送った手紙を引用し、次のように述べている。

ワーグナーの筆が伝えるように、写真で見る当時の若い王は、すらりと背が高く、暗鬱な眼のなかに燃える瞳を輝かせた、ロマネスクなみずみずしい美貌の持ち主である。もっとも、この容貌には或る懦弱なるもの、見るものの不安をそそるある奇妙な脆さがないとは言えない。(中略)音楽家の炯眼は、後年の王の悲劇をあまりにも正確に見抜いているようだ。

実際にルードヴィヒ二世が若い頃は美貌に恵まれ、多くの画家らによってその姿が描かれるほどだったが、王の“狂気”が進行するにしたがって、その容貌は目に見えて損なわれていく。35歳を過ぎると顔は膨らみ、目にワーグナーを讃嘆させた鋭気は消え、晩年には痛々しい姿となった(シュミット村木眞寿美著『ルードヴィヒ二世の生涯』河出書房新社)。彼の写真を一瞥すれば、精神科に勤務した医師や看護師であれば晩年の統合失調症患者のありさまを認めることになるだろう。

さて、ルードヴィヒ二世が建てたもので特に有名なものが、東京ディズニーランドにあるシンデレラ城のモデルといわれているノイシュヴァンシュタイン城だ。現在はロマンティック街道の終点として人気の観光スポットであり、ドイツの代表的な観光地として人々を惹きつける一方で、悪趣味に辟易するという意見もある。王が中世の世界観を再現するために建てたこの城は宮廷劇場の舞台装置・舞台美術を担当していた画家にデザインさせ、さらに城内の主な部屋にワーグナーのオペラ作品のモチーフとなった神話の一場面の絵や装飾を施させた。孤独なルードヴィヒ二世はワーグナーの音楽以外の快楽を見出すことができなかつたのかもしれない。『狂王』の中で、龍彦は王の建てた城について

「芸術の垢外にある、病める魂の城」と位置づけて、「あくまで一人の病人の生活、徐々に昂進してゆく分裂症病者の生活」の場だと指摘している。その鋭い洞察力には驚くものがある。なぜなら私は30数年にわたって精神看護の仕事に従事し患者と関わってきた一人として、このルードヴィヒ二世に、病的な世界に生きてきた統合失調症の患者の姿が重なるからである。さらに驚くべきことに、龍彦が初めてノイシュヴァンシュタイン城を訪れたのは1970年なので、『狂王』を執筆した当時、龍彦はこの城を自分の目で見てはいないのだ。

これに加え、龍彦はルードヴィヒ二世がワーグナーに心酔していた点からもこの城について分析している。

ニーチェによれば、あらゆる芸術の上位に劇場芸術を置くという信仰が、ワグネリズム(編集注:ワーグナー主義)の頹廢であり危険性であったのであって、これならルードヴィヒ二世の場合、ぴったりなのだ。

(中略)

王の名前をあれほど有名にした豪華な城も、劇場にほかならなかつた。彼が自分のために自分で演ずる劇場である。(中略)——ワーグナーによって掻き立てられた劇場趣味は、かくて王の精神を次第にむしばみ、(中略)王の世界像を限りなく分裂させる結果になったのである。



シュミット村木眞寿美
『ルードヴィヒ二世の生涯』
(河出書房新社)

*病跡学...精神病理学の応用分野。芸術・科学などの方面で傑出した人の伝記や作品を精神病理学的に調べ、その中に見られる精神の異常と創造との関係を明らかにしようとする学問。(『精選版 日本国語大辞典』)

しかし、王がワーグナーのオペラに登場する英雄になりきって一人戯れる姿に周囲がどんなことを思ったのかは想像に難くない。当時のバイエルンは絶対王政とは程遠く、王は首相や議会の意向により意に染まぬ決断をすることも多かったという。ルードヴィヒ二世の壮大な劇場趣味は、為政者としても、国の財政としても多くの攻撃と批判を受け、周囲の人も離れていった。それが彼の自己の精神像を限りなく分裂させ、王はますます自分の世界にのめりこんでいった。ルードヴィヒ二世にとってみれば、政争による精神的混乱の最中に周囲の裏切りにあったと感じ、より一層人間不信と幻滅から音楽の世界にはまり込んでいったとも考えられる。こうしたルードヴィヒ二世の環境がより孤立感を深め自我崩壊に至ったのだろう。

このようなルードヴィヒ二世の病的な状態に家臣は危機感を抱き、狂王という烙印を押して廃位しようと画策した。ルードヴィヒ二世は、1886年6月12日廃位され、翌13日にシュタルンベルク湖で、主治医と共に水死体で発見された。その死の詳細については未だ謎のままである。真偽は不明だが、ルードヴィヒ二世を狂人として葬り去ることで幕を引こうとする社会的・政治的な大きな力があつたに違いないと私はみている。

私もノイシュヴァンシュタイン城を訪れたが、この城に関わるルードヴィヒ二世を始めとした登場人物は歴史の狭間の中で浄化され、この城へ病跡学的、倒錯的な美しさを付与していると感じられた。そんな美しさから王の狂気の徴候を感じ取り、理解し、表現することができるのは鬼才と狂気を持ち合わせた芸術家たちにしかできないのではないだろうか。現在にいたるまでルードヴィヒ二世は多くの芸術家の関心を引き、悲劇の王として映画や小説、舞台の題材となっている。気ままに出歩けない昨今の気晴らしに、まずはこれらを手にとってみてはいかがだろうか。また、ルードヴィヒ二世は精神的に悩める王として病跡学の対象となっており、文献も多くあるので、皆さんにも一読を勧めたい。そしていつか現地でノイシュヴァンシュタイン城を見学してきてほしい。実際にこの城を目にした皆さんがいったいどのようなことを思うのか、それが私にはとても楽しみである。



『死ぬまでに行きたい世界のお城&宮殿 魅力あふれるおとぎの城コレクション』
(c) 笠倉出版社

【参考文献】

- 澁澤龍彦『狂王』（プレス・ビブリオマーヌ、1966年）
 澁澤龍彦「バヴァリアの狂王」（『異端の肖像』（河出書房新社、2008年）所収）
 シュミット村木眞寿美『ルードヴィヒ二世の生涯』（河出書房新社、2011年） 版元在庫なし
 澁澤龍彦「狂王の城」（『ヨーロッパの乳房』（河出書房新社、2017年）所収）
 澁澤龍彦『滞欧日記』（河出書房新社、1999年）



～図書館からのお知らせ～

蔵書点検にともない、休館します

3月1日（月）～5日（金）の5日間は、蔵書点検を実施します。

図書館への入館はできませんので注意してください（貸出・閲覧・自習もできません）。図書の返却は、1号館事務局近くのブックポストを利用してください。

また、この期間中はその他の文献複写、相互貸与といったサービスも止まりますので、調べものはこの期間外にお願いします。

【編集】幕張分館司書 井本紗織

【編集協力】幕張分館図書館運営委員会

看護学科……内田雅代・堀之内若名 理学療法学科……舟橋久幸・平野康之